

## 20 中国伝統医学と道教 (第二十三回)

## 五石散

吉 元 昭 治

中国の長い歴史のうちで、人々に莫大な危害を及ぼしたのは、これから述べる五石散とそれに続く鍊丹(外丹)の服用と清末の阿片問題がある。秦、西漢時代には黄白術といわれるものがあつたが、五石散、鍊丹服用の弊害は唐代まで約五〇〇年つづくことになる。

五石散(五靈丹)についてはすでに赤堀昭氏や、演者が本学会誌に書評をかいた川原秀城氏の『毒薬は口に苦し』などが詳しい。

有名な魯迅(一八八一〜一九三六)に『魏晋風度及文章与薬及酒之関係』という講演があり、文学的見地から五石散を服用した人々の有様と「竹林の七賢人」にも言及し平易に解説している。また余嘉錫(二八八四〜一九五五)は『余嘉錫論学雑著』に『寒食散考』がある。こ

の中で彼は研究的態度で貫き文献的考察にも勝れ、歴史的に魏晋から唐に及ぶ膨大な論文で考究し、五石散を論じるには第一級の文献である『抱朴子』金丹篇では五石とは丹砂・雄黄・白礬・曾青・磁石といい、隋巢元方の『諸病源候論』では鐘乳・硫黄・白石英・紫石英・赤石脂だといっている。張仲景『金匱要略』には紫石寒食散方(傷寒を治す。紫石英・白石英・赤石脂・鐘乳他八種の草薬・侯氏黒散(大風四肢煩重、心中惡寒を治す。礬石の他に白朮などの十三種の草薬・礬石湯(脚氣衝心、单方)・消礬散(黄疽、消石と礬石)・礬石丸(婦人病、杏仁と礬石)などを見るが礬石(明礬)が治療に用いられていたことが分る。

五石散を世に広めたのは『魏書、諸夏侯曹伝』にある何晏(?〜二四九)である。魏朝一族で『道德論』を著すほどの文才がありながら五石散に溺れついに三代斎王により殺されている。いつもお白粉をはなさず歩く時も自分の影をふり返りふり返りしたという。『世説新語、容止篇』ではその顔の色はぬけるように白く、大汗をかいて拭いてもその色つやは変らなかつたといい、同書言

語篇には、「五石散を服用すると病気を治すだけでなく、精神が明朗となる」といったとある。このような有様で五石散の服用は人々の間に滲透し、その副作用、害毒は『鍼灸甲乙経』の著者皇甫謐も例外ではなかった。この石薬を服用すると熱が出て、厚い衣類をまとうことができず、皮膚は爛れ、風呂に入れず、冷えたものを飲食（寒食散の名の由来）するようになるがただ酒は熱いものがよいとされた。『諸病源候論』ではその症状を五候といい、六反というしてはならないこと、七意という心がまえが記され、服用者はその毒力と体力にもよるが五、六年から十年位で死亡するといっている。当然これらによる中毒症に対する療法（解石法）もあつたわけだ。『千金要方』を初め『医心方』『太平聖恵方』『普濟方』さらに韓国の『郷薬集成方』『医方類聚』『東医宝鑑』などにも見られるから広く知られていた事が分る。唐代二十人の皇帝のうちこのために命を落したものが四―六名はいる。なお『千金翼方』の中に五石腎氣丸、五石烏頭丸、五石更生散、五石護命散などの名がつけられている。

ではどうして初めは鉉物性薬物が治療目的に使われていたのにこのような結果となつていったかという疑問がのこる。鍊丹を精製する方法の一つに「六一泥」という方法がある。この中には礬石・礬石・戎塩・鹵塩を中心として牡蠣・赤石脂・滑石を加え密閉して猛火で九日間焼いてつくるものである。このうちいままで何回も出てきた礬石は本草書を見ると大体無毒、酸寒とあり、一方の礬は有毒、辛大熱となつてゐる。これは硫砒鉄で砒素のもとで毒砂とか鳩毒ともされている。李時珍は『本草綱目』の中で「古方に礬石と礬石は常に混淆しているがこれは二字の形が似ているからだ」といつているが最近、周益新氏等もこの説をとつてゐる。本題の由来を考えると納得できよう。総会では『道教経典』から抽出し礬石と礬石の混乱と実例の処方提示したい。

(吉元病院)